

講評 第十回 「胡堂・あらえびす大賞」 音楽感想文の部

審査委員長 侘 美 淳

■第十回の胡堂・あらえびす大賞・音楽感想文の部に全体で昨年を上回る五十四点の応募がありました。県内・紫波町内はもとより、北海道・関東・兵庫・広島など県外からの応募もありました。どの感想文も「学校の音楽授業や日常の音楽体験で発見したお気に入り」の音楽、「自分の人生の中で支えられ、後押しをしてくれた大切な音楽への感謝」など、音楽から受けた感動や気持ち率が率直に表現されていました。皆さんが実に多様な音楽と出会い、音楽をいとおしんでいることがわかりました。

■いくつかの感想文について所感を述べます。

【ポピュラー部門】小5二階堂結月さん、一つの歌の言葉や旋律から「情景や意味」を想像する。悩んだことのない私が「悩むことに気づかされる。」これからも音楽を通し、まっすぐに自分の人生を歩んでいく決意を感じました。神戸の中学2年稲永聖怜さん、突然の転校を基に、清らかな感性に基づく自身の繊細な心の機微を一つの楽曲を通し的確に表現しています。旋律・リズム・歌詞などを分析的に捉えつつ、人の死生観にも及ぶ思慮深い音楽感想文で秀逸です。高校2年の村井愛理さん、昭和時代の歌なのに、令和の時代に生きる若者の新鮮な感性が、この曲の名曲たる所以を再認識させてくれました。「明るい曲調で生きることの苦痛や鼓舞のどちらも織り交ぜて歌にする矛盾が新鮮だった。」深い洞察です。

【クラシック部門】小6神壮哉さん、音楽を聴いて「心があったかくなる。やさしくて心が落ち着く。」音楽の要素である速度や旋律についても分析を加えながら、自分の気持ちと向き合っている様子が何よりです。中3佐藤美結さん、司馬遼太郎のエッセイに基づく難解な合唱曲との出会いを通し、「人間こそ一番偉い存在か」という根源的な問いを思索していることに感心しました。人間のもつ喜怒哀楽の気持ちを、いかに音楽表現に結び付けて取り組んでいるのか垣間見られました。社会人の白井明子さん、田園交響曲を題材にベートーベンの最も苦難に満ちた時期について、楽曲と文献等から思索された感想文です。自身の教養と豊かな感性が織りなす秀作です。今後とも「奔放不羈（ほんぼうふき）」を根底に「善が集積された音楽」を楽しんでまいりましょう。

■人は、長い歴史の中で「文化・芸術」を育み、人間の生きている証として大切にしてきました。「野村あらえびす」がこよなく愛した音楽の表現や鑑賞もその対象です。これからも、いろいろな音楽との出会いをとおし、人生が楽しく、豊かになることを願っています。